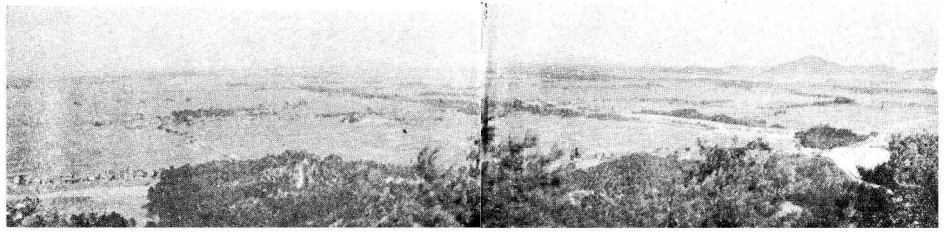


一、ひらけいくわが村

4



石切山より見たるわが村の全景

(一) 村のあらまし

経度

イギリスの天文台を〇度と考え、西と東に一八〇度きざんだ線

緯度

赤道を〇度と考え、南と北に九〇度きざんだ線

私たちが外国に行って、「あなたの生れた土地はこの世界地図のどこです？」と問われた時、どのように言えばよいだろう。

世界のどこの国の人たちにも分ってもらえるためには、校門のよこの標柱に書かれてある「東経一三六度二分四四秒、北緯三五度五分二秒四」と答えるより他にない。これはどこの国にも通じる約束であつて、村や町には必ずこのような標柱が立っている。逆に考えてみると、東経一三六度二分四四秒の線と、北緯三五度五分二秒四の線の交わった地点は祇王村より他にないということになるのである。

5

世界地図ではただ一点に過ぎない祇王村も、日本地図を見ると少しははっきり分ってくる。更に滋賀県地図をあけてみると、もはや点ではなく、はっきりと形でもってあらわされている。もう少しははっきりさせるために、野洲郡地図によってしらべてみよう。野洲郡はその大部分が平地である。ただ野洲、祇王、篠原の三ヶ町村にめずらしく山がある。ということは琵琶湖岸よりそれだけ隔たっているということである。辻町の国道あたりが等高線百米であるから湖面とは十五米余りも高い。山をもつ三ヶ町村は互に隣り合っており、中仙道によって結ばれている。祇王村がもう一方接しているのは、童子川を境としている中里村である。

等高線

東京湾の海の面を〇メートルとし、これを基にして同じ高さの所を結んだ線

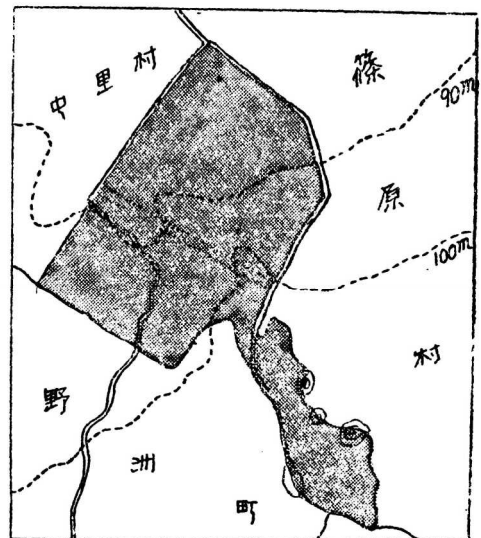
6

阿部子山

一名宮山ともいう

こうして三ヶ町村にかこまれた村の形は、つくられたような長四角で、この四角な形の入口にちょうど柄をつけたように細長くくいこんでいる。この柄には辻町の城山、阿部子山、吉祥寺山等の山々がつらなっているのである。

祇王村を昔は長原といったとか。この名前をつけられた意味が分るような気がする。長原はその後城がつくられ、戦も起り、



(祇王村略地図)

いくたびか移り変って明治二十二年に新たに町村制がしかれて、今の七大字が一つの村をつくって義王と名づけられた。更に明治二十七年に今の祇王と改められたのである。

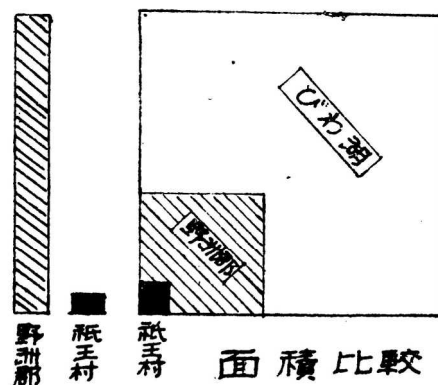
長原に住みついてきた昔の人びとは川によって苦しみ、川とのたたかいによって心をみがいてきた。童子があらわれて、その引いていくあとを掘って出来たという童子川の水は今なお神秘的な色をおびて流れている。祇王祇女の伝説で名を知られている祇王井川。又、県下でもめずらしい家棟川は祇王の中央部を流れていたが、いくたびか水害のあと今は改修されて新家棟川となった。

7 人には誰でもただ一つの生れた郷土をもっている。それがたとえどのようなところにせよ、かけがえのない土地である。そして私たちの生れ故郷が祇王村である。

(二) 村のひろさ

長四角の形に細長い柄をつけたような祇王村の広さは凡そ六・四平方キロメートルある。この形を変えて考えてみると、一辺の長さが二五〇〇メートルの正方形の面積と同じ位にあたる。古い台帳には六四三二段と書かれてあった。野洲郡全体の面積は一〇七平方キロメートルであるから約十七分の一にあたる。

人口比較



郡内には十二ヶ町村あるから、他の町村と比べて大きい方ではない。びわ湖の広さを百等分するとその一つ分はちょうど祇王村の広さにあたる。だから教室をびわ湖の広さとするとき祇王村は一平方メートルとみてよい。祇王村と同じ広さをもつ村が六三〇集まれば滋賀県の広さになるのであるが、その滋賀県も日本全体から見ると小さな県なのである。

日本は戦争によって約半分の国土を失った。そして現在は四つの細長い島に八三〇〇万人住んでいる。

8 (三) 人 口

昭和二十五年の国勢調査によると、祇王村の人口は男子一六四五人、女子一六六三人で合計三三〇八人である。今これを野洲郡全体の人口と比べてみると、面積の場合と同じく十七分の一である。野洲郡はその大部分が同じような平野であるから、どの村も大体同じ程度に人が

八十年間に日本は二・五倍であるのに本村はわずかに一・三倍の人口の増え方、つまり京・阪・神へ特に二・三男が行ったことを意味する。京・阪・神の活力の源は琵琶湖の水だけでなく湖国の人間の数もあずかって力あり。

石川啄木
あはれかの我の教へし子等もまたやがてふるさとを棄てて出づらむ

密度
面積一平方メートルに何人住んでいるかという度合

これを逃散（ちょうさん）といった。消極的な反抗で、慶長十六年（一六一一）隣の蒲生郡の逃散は有名

住んでいるということが分かる。

滋賀県の人口は約八六万であるから、祇王村はその二六〇分の一にあたる。面積の場合が六三〇分の一であることを考え合わせると、野洲平野からとれる米は沢山の人を養っていることになる。

野洲郡はどの町村をしらべてみても、女子の方が男子よりも多い。これは滋賀県全体を通じて同じようなことが言える。東京や大阪のような商工業の発達した大都市は反対に男子の方が多い。このことは滋賀県が農業生産中心の県であることをはっきり示している。

農業中心であることは、次に人口の移り変りをしらべてみると一そうよく分かる。明治五年の祇王村の人口は二四五一一人であった。昭和二十五年と比べてみると約八〇年間に一・三倍にふえた。滋賀県全体の人口も同じく八〇年間に一・三倍にふえている。

9 明治五年の日本の人口は約三三〇〇万、それが昭和二十五年には約八三〇〇万にふえたのであるから、約八〇年間に二・五倍になったことになる。日本全体のふえ方からすると祇王村は約半分である。

東洋レーヨンの工場には祇王村の人口の約三倍の人が仕事をしている。田畑から生産されるものだけによって生活することには限度のあることがこのことによっても分かるのである。

日本の商工業の中心地である大阪は、一平方キロメートルの中に約二〇〇〇人が住んでいる。滋賀県はびわ湖にも人が住んでいるとみて二一五人、わが祇王村は五一七人である。アメリカはわずかに二五人であることからみると、せまい土地にすい分沢山の人が住んでいることになる。

（四） 農業進歩のあと

祇王村が昔長原と呼ばれた頃から村の産業の中心は農業であった。ところが耕やす田畑は自家の土地ではなく、その上に重い税金をかけられたので、働いても働いてもその働いた分だけ取り上げられてしまった。とれ高の全部をあててもまだ足らなかったと言われている。だから耕やす田畑さえ捨ててしまうようなことさえ起った。こうして今までの良い田畑はつくり手がなくなって、次第に荒地地となっていた。

10 明治の世の中になって、土農工商の制度がなくなり、税法も改められたので農業に従事するものがおいおいにふえて、荒地地はもとの良田にかえたのである。

次に農業技術の進歩のあとをふりかえってみよう。苗代の頃ともなると、美しく整えられた短冊形の苗代が村のはすれに一かたまりとなっていてひろびろと見られる。以前は平播であって、しかも思い思いの場所に苗代がつくられたそうだ。手入や水の便からすると大きな進歩で

つき
機械おし、機械つ
きともいう

あろう。

猫の手もかりたい田植の頃。猫の手もかりたいはすである。一株一株人の手で植えられていくのであるから - 一反の株数二五〇〇〇、祇王村の水田五〇〇〇反とみて、約一億株が一人一人の手で粒えられていく。

田植が終ればつきが始まる。除草機具もすい分いろいろの変ったものが使われるようになった。炎天に湯のような田に腹ばいになってのたりする回数がはぶかれたことは何といっても助かる。

足ふみ脱こく機は手軽でひろく使われてきたが、これも発動機による脱こく機に変わりつつある。

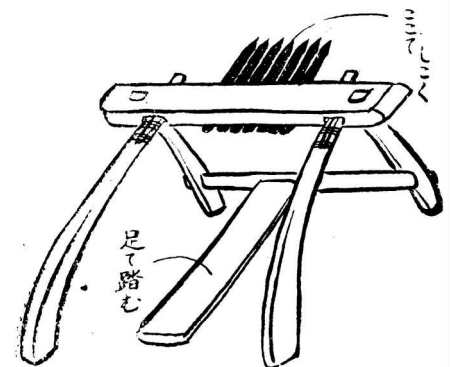
いなごきと言われた幼稚な機械でごしごしこき落していた頃の話は、今では年寄の語り草となっている。

11 干し上ったもみは、雨の日にうすすりされるのが常であった。うす暗いランプの下で、働きもの総出の夜なべ仕事は、発動機や電気で自動式に手ぎわよくすられていく今日と比べると、うそのような話である。

こうして余った時間と労力が、副業の方にまわされたり、楽しいレクレーションにも費やされるようになったら、農家の将来は明かるくなっていく。

技術が進むにつれて、一反からとれる米高は次第に増してきた。明治十四年以前には、一反当り平均四俵と記録されている。それが今日では八俵位はとれるのであるから約二倍になった。

米の増収については肥料ということも考えてみなくてはならない。近頃は金肥をどのように使ったら米が沢山とれるかが農家の苦心のしどころであろう。一方堆肥や緑肥も以前よりは多く使われるようになったことは、次のことについてもうかがわれる。明治三十九年には牛の数は祇王村合わせて九〇頭であった。それが同四十三年のしらべでは一七八頭と、四年間に約二倍にはね上がった。昭和二十七年に調査してみると二五〇頭となっている。



(いなごきの図)

(五) 辻 山

12 春祭りの祭礼が終ると、明けて六日のごえんには、折りづめ、重箱にごちそうをつめて、家族うちそろって辻山に出かけ、一日の団らんに日の暮れかかるのも忘れる。秋の取り入れも終ればほっと一息、店先の松茸の香にさそわれて、山のあくのを待ちこがれる。こうした季

後宴
宵宮・本祭について大事な祭の行事で、神様を御送りするため河原や山へ御ちそうを持っていく。この辺は山から天へ神様がお帰りになると思い山へいく。

学校林に右のような標柱が建てられている。

- ・ 祇王村の水禍の源はここだ。
- ・ 村を守ろう
- ・ 水を防ごう
- ・ 山を愛しよう
- ・ 天井川をくいとめよう

我等の務

13

祇王小半枚の学校林は、保安林二十六町二反五畝七歩の内三反二畝十二歩をしめている。

学校林（大正四年）
御即位大典記念学校林

市
交通の便利な処、お寺やお宮のあるところ。領主に保護してもらえる処。常念寺もあり城下町でもある永原市はかなり古い。草津 - 守山 - 永原 - 江頭一八幡で終る。かく露店商人は流れていく。

14

節の景物は、湖辺の村では味うことの出来ない楽しみの一つである。

今青々と若松が生えしげって来た辻山も、記録をたどってみると、いろいろの移り変りがある。

「昔は山の木はよくしげって、老松や古木が山に満ちていたが、中古、寛文六年の頃から大篠原が濫伐をして、ついた辻町地先の大方を伐ってしまった。そこで山論がおこり、前後三年にわたって訴訟をおこして、ついに寛文九年八月二十七日に辻町の勝訴となった。ところがその頃には山は殆んど禿山になり、それ以後も続いて濫伐したので明治初年には一本の松もなくなってしまった。」

明治十六年に砂防工事が出来てから保安林となったので、一般には伐ることが出来なくなっている。

学校林が出来て毎年手入れに行くようになったのは、それから以後のことである。



（砂防保安林の標柱）

（六） 永原の商店街

永原は昔から、この地方の商業の中心地であった。それは今も永原市の開かれていることによって分る。

農業本位の土地だけに商業としては、小売業者が多いが、昭和二十七年のしらべでは、上町、下町を通じて商店は二十一、その大半は上町にかたまっている。業種の別にあげてみても十指に余る。生活に必要なものは殆んどこの上町で手に入るわけである。

永原市はいつの頃から始まったか、くわしくは記録されていないが、守山市、江頭市と共に盆と年末の年中行事の一つとして、盆、正月の必要品や、いろいろな品物が売買され、昔はずい分にぎわったものである。毎年八月十三日、十二月二十八日に開かれ、相当な人出である。ところが上町の商店街が発達するにつれて、生活に必要なものはいつでも買うことが出来るので、市本来の意義がなくなり、売っているものも子供相手の玩具に、お花位になって次第にさびれてきている。

蛍光燈に色どられていく夜の上町は明かるい。朝鮮人街道に沿った永原一帯は今後もますます商店街として発展していくことだろう。

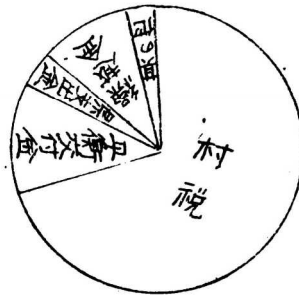
（七） 村 の 台 所

村の台所をあずかる役場では、村で一年間に必要な経費をみつもり、

くわしい予算書をつくって例年三月の村会に出される。村議会ではこれを研究し、話し合い三月中には議決しておかなくてはならない。これが村議会が一番大きな仕事で、国の予算を国会で、県の予算を県会で審議するのと同じしくみである。

歳入の主なものをひろってみると、村税が七〇パーセント以上を占めている。昭和二十七年度の村税は約三五九万であるから、一戸あたり約五

歳入の部



歳出の部



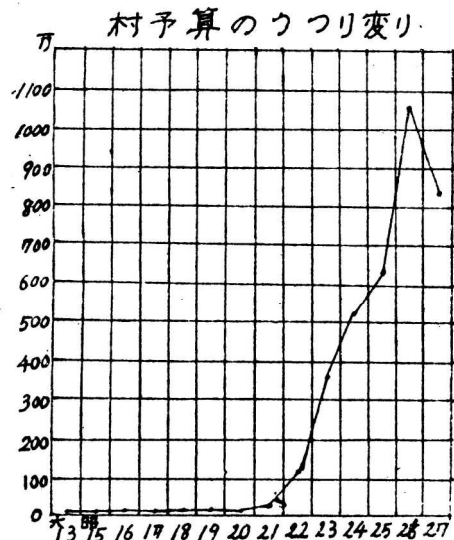
七〇〇円村民一人あたり約一〇〇〇円。村税として収めることになる。国が地方財政を補足する平衡交付金も六〇万円をこえ全体の一〇パーセントはあるわけである。

15 歳出の主なものは、役場費と教育費で合せて六〇パーセントとなる。

昭和二十七年度の予算は全体で、七三五万円でこれを大正十三年の三一四〇八円と比べてみると、約二三〇倍にのぼっている。特に戦前と戦後を比較すると大変なふえ方である。

いもがゆをすすっていた戦争中のことはさることながら、戦後、生産が元通りになるまでの四年間は、物が不足するところから、インフレとなり、物の値段はぐんぐん上っていった。ということは、お金のねうちがそれだけ下ってきたことになる。

下のグラフをじっと眺めていると、私達の生活の移り変りがしみじみと分って来るのである。



インフレ
戦争後生産施設がこわされたので物資が不足し、一方買いたい者が多いので、紙幣を沢山発行したのと相まって物の値段がどしどし上ってきた。

(八) 創立記念日

16 十月一日は祇王小学校の創立された記念日で、この日を記念して秋の運動会が行われる。運動場では子供達の応援にまじって村の人達のにぎやかな話し声が終日聞えてくる。学校が始めてできた頃のことは、七〇歳位のおぢいさんがよく知っておられる。「私達の若いころは...」と話し出されると昔をなつかしんで話はつきないであろう。

当時の
村長は
田中久太郎氏
校長は
土田利三郎氏

17

明治十九年十月一日に今の場所に尋常科永原小学校ができた。それから以後毎年、五〇人卒業されたとしても三〇〇〇人以上の人達がこの学校に学ばれたことになる。学校と名のつくものが生れたのは、もっと以前のことで、明治六年に常念寺内にあったのがそれである。翌年正徳学校と名づけられている。当時北村にも研精学校ができて中北、北村だけはここで学ばれた。現在の七大字が同じ学校で勉強ができるようになったのは、明治二十二年町村制がしかれてからのことである。

学校がこの地に建てられてから二回改築されている。最初は明治二十七年で、平屋の立派な校舎が建った。この校舎は昭和八年今の二階建本館が竣工するまでの約四〇年間祇王にとってはなつかしい校舎となった。

現在の校舎は通る人が高等学校かと問う程立派な校舎で、郡内にも誇ることができる。これ程よい木材と念の入った建築が三六五五二円で出来上っているのであるから驚く。落成式当日には未明の中に打ち上げられた花火は辻山にこだまして喜びを村民につたえたということである。

当時卒業された人達の、心をこめて植えられたヒマラヤシードは今、二階の屋根をこえる程大きくなっている。

(九) 祇王村診療所

郡内でもめずらしい大規模な診療所が開設されたのは、昭和二十七年四月一日である。敷地七二〇坪、建坪一八五坪のスマートな建築で、工費五一四万円で完成している。旧家棟川を背に負い、運動場を真下に見ることのできるこの地は、村里を少しはなれて、空気もよく、診療所としてはまことに適した場所に建てられた。

玄関を入り、広いホールを通過して各室を一巡すると、内科、外科、歯科、婦人科等の札が目につく。手術室には最新式の手術台、無影照明燈、蒸気消毒器等の近代的医療器械があり、やがては三〇〇ミリのレントゲン撮影機も備えつけられるとのことである。

祇王村診療所の前身は日赤診療所で、昭和二十一年に開所され、約六年間続いてきた。当時と比べてみると、利用度は約三割ふえている。利用されているのは、祇王村が全体の七〇パーセントで、中里、野洲、篠原がこれについている。



(診療所利用範囲)

18

医療件数と季節の関係もおもしろい。一、二、三月に七、八月は最も多く、四、五、六月と九、十、十一、十二月の農繁期には、ぐっとへってくる。秋・五月の忙がしい時に病気にかかる人が少いのは、少し位無理をしておら

無影照明燈
手術の時に使われ
る照明燈で、影がう
つらないように工夫
されたもの。

れるのか、研究するとよい問題である。盆正月に胃腸患者が大変に多いということは、食生活の上で考えなくてはならないことである。

(十) ゆ め

村の中央に小学校と隣り合って、二階建の洋館が建った。これが県下に誇るわが祇王村公民館である。現在県下には八十八の公民館があるが、その多くが名のみの中でこれは真に公民館という名に恥じない内容をもつものとして、モデル公民館に指定されたのである。

県下のあちこちから参観者が見えるが、それ等の人に説明されている中に

19 「小中学校九年間は義務教育で満十五歳までは学校で教育されるが、卒業しても公民としては、まだまだ不充分である。社会人としての修養は老人になるまでやらなくてはならない。日本人は、人と人とのつき合いが下手である。現在どの町村でも、社会人がお互いにこうした修養をしていく機関が少ない。特に農村は健全な娯楽の施設に欠けている。そこで私の村では公民館は村人全体の修養と娯楽の中心とするために、村民の意見をまとめて、今日のような公民館まで仕上げてきた。村をよくしていくためには先ず公民館をよくしてかからなくてはいけない。今後もしどし経費をかけていくつもりである。」

というような意味の話をされていた。

階上の奥は図書室となっている。周囲の戸棚には、いろいろの本が種類別に美しく整頓されている。室は明かるいし、この室に一步入ると、本を手にとって見たくなる程である。次の室は青年学級の勉強するところ、夜、本を見るによいというので蛍光灯がつけられているのは、如何にも近代的な感じがする。この室ではまた母親学級も開かれている。次のたたみの室は女子青年学級の生徒が和裁を実習するところであるが、生け花や茶道を学習するのもこの室である。生徒の帰った後は、囲碁や将棋等に花の咲くこともある。日本人はたたみの部屋に坐ると心が落付くと言われるが、よく使われる室である。この隣りが、十台の新型ミシンを備えつけた洋裁の室で、青年学級が実習するだけでなしに、母親学級の開かれる日は、お母さん達も新しいデザインの洋裁を習われるのに一生けんめいである。年寄りがよい講師の話を聞いたり、洋裁を身につけていかれることは、息子の嫁を理解する上に大きな力となることだろう。

階下は床張りの広間で、平素は室内娯楽場になっている。ピンポン台がすらりと並んでおり、年寄りの人が節のできた手にラケット々にぎって打ち興じておられるのは、まことに好ましい図である。ここでは講演会が開かれたり、村民大会も行われる。

20 素人演芸会の日などは、はいり切れない程である。暗幕や映写装置が出来ていて、村の映画鑑賞会は日をきめて行われている。笑顔ですれ合う村人の足どりは軽やかである。

こんな公民館ができれば - - 夢ははてしなく続いていく。

(十一) ひらけいくわが村

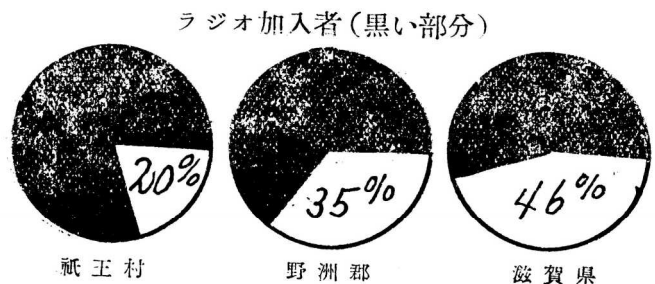
私達が日々社会の出来ごとを知る最も手近なものは新聞とラジオである。

新聞は明治初年に始めて発行されたものであるが、大正年間では、まだとっている家の方が少ない有様であった。現在では殆んどの家がとっており、とられていないのは、わずかに七パーセントに過ぎない。

ラジオのとられていないのは全戸数の八〇パーセントである。これ程に普及されてきたのは、最近のことで、技術の進歩するにつれて、新聞に追いつこうと

している。

郡市別の普及状況をしらべて見ると、六〇パーセント以上は三郡市で、野洲郡六五パ



21 ーセント、栗太郡六二パーセント、彦根六パーセントとなっている。これで見ると、野洲郡は県下で最も普及している郡であるが、祇王村はその中でも上位であることが分る。

新聞ラジオの普及状況だけで文化の程度が高いときめることは出来ないにしても、生活程度の高い一つの例にはなると思う。

以上で「ひらけいくわが村」のあらましを考えてきた。これ以後書かれてある事柄によって、歴史の流れの中に、一そうはっきりしていく問題である。